

第7回市立中学校のあり方検討委員会 会議録（概要）

- 1 日時 令和5年4月27日（木）午後7時00分～午後8時35分
- 2 会場 千手コミュニティセンター 千年の森ホール
- 3 出席者
 - (1) 委員 19名
 - (2) 事務局 6名 渡辺教育長、鈴木教育文化部長、玉村教育総務課長、細木学校教育課長、藤田指導管理主事、山岸教育総務課長補佐

4 会議概要

- (1) 開会あいさつ（雲尾委員長）
- (2) 議事

以下のとおり審議が行われた。

| 発言者 | 発言概要 |
|------------------------------------|---|
| ① 検討委員会の会議日程及び内容等について（令和5年4月27日現在） | |
| 事務局 | （資料に基づき説明） （質問等なし） |
| ② 第6回検討委員会（意見交換）グループ討議の取りまとめについて | |
| 事務局 | （資料に基づき説明） |
| 委員 | 意見交換の内容については、これからまた議論していくと思うが、ホームページでどれを公表するのか。 |
| 事務局 | ホームページには、今回の資料として文字に起こしたものを公開したい。公開の際は発言者の氏名は削除させていただく。 |
| 委員 | 資料の中に考え方として「スクールバスの活用」があるが、これは部活動に対するスクールバスの活用ということで、通学用と部活動の捉え方を具体的に分かるようにしないと、理解できない部分もあるのではないかと。 |
| 事務局 | 事務局でもう一度確認した上で、補足があればそれを追記する形でホームページに公開したい。 |
| ③ 十日町市の小中一貫教育について | |
| 事務局 | （資料に基づき説明） |
| 委員 | 学力について、学校規模による違いはあるのか。 |
| 事務局 | 学校による差はない。その学年等によって違ってくると思うが、規模によってというもの、例えば小規模のほうが学力が高いとかということも決してないと考えている。 |
| 委員 | 資料にNRTのグラフが2つあるが、真ん中の棒グラフ、これは小学校2年生から中学3年生のNRTを実施した時期の学年を表しているが、上の |

折れ線グラフの中学校というのは中2、中3だけの平均値が書いてあるのか、中1、中2、中3の実施年の平均値を書いてあるのか。それによって何かグラフが変わると思うので、教えていただきたい。

事務局 上の折れ線グラフは中1から中3の全学年平均である。真ん中の棒グラフは、小学校2、3、4、5、6、そして中1、中2、中3のものだが、実際に実施したのは1年生が終わった2年生の最初に実施したものである。

委員 では、中1ギャップとして、中1で標準偏差が下がるグラフがあるが、これは小学校6年生の段階で落ちてしまっている部分の中1の春に分かったというグラフになる。

事務局 小学校6年生での課題はあるかもしれないが、小学校6年生から中学校1年生になったときの中一ギャップというものも現実としてあると考えている。また、当市では中学校に上がるときに、市外の中等学校へ進む方がかなりいらっしゃる。この点もこのグラフの要素にあると認識いただければと思う。

委員 特別支援教育の充実について、この10年ぐらいで1.8倍近い状況まで特別支援が必要な児童生徒さんが増えている。特別支援が必要な方がなぜここまで増えてきたかというのも気になる部分ではあるが、実際どのような取組をなされて、今後の方策としても、どのような取組で考えられているのか伺いたい。

事務局 特別支援教育を受ける児童生徒数というのは全国的にも増えている。要因の大きなところは、特別支援教育というものが地域や家庭、そして学校の中で理解が広まり、人数が増えてきていると考えている。ただ、特別支援学級に入るほどではないというお子さんもおおり、そういった子たちに支援をするために通級指導教室というものがある。例えば対人関係のスキルだとか、そういう発達に関する学びをする場、それから赤ちゃん言葉や吃音などを直す言葉の通級指導教室や、聞こえの通級の教室がある。週に何回か通う教室となるが、そこに通うお子さんが増えてきている。

3年前までは、十日町小学校に発達通級と言語の通級、そして聞こえの通級の3つがあったが、それが3年前に中学校にも1つ発達の通級ができた。そして、一昨年度には千手小学校にも1つ発達通級が増えた。今年度から川治小学校に聞こえの通級が増え、少しずつ通級を増やして、通常の学級のお子さんたちにも対応しているような形になっている。次年度も中学校で1校だけでは足りないということで増やす計画である。

委員 感想であるが、どこも中1ギャップというのは恐らくあるのかなとも思うが、個人的な感覚だと決してそれだけじゃない、いわゆる学校環境だけじゃなく、家庭もあるのかなと思う。この意見のまとめを見たときに何となく

違和感があった。振り返るとこの項目の中に地域や学習などいろいろある中で家庭みたいなワードが一つもなかったというのが何となく違和感があった。しかし義務教育をする上ではやはり家庭環境というのは大事であると思う。

委員 小中一貫教育を考えるときに、小学校と中学校の先生の交流の問題や接続点が大切だという話があったが、中学校と高校をどのように学びをつなげていくか中学校レベルとしても考えないといけないと思う。そこは、市の教育委員会なので中学校までということにならざるを得ないのかもしれないが、市民・県民の立場から、高校や大学、専門学校などにどうやって学びをつなげていくか。中学校で切れて終わってしまうと、非常にもったいないことだと思う。子育てしているときに中学校で終わるわけではないので、中学、高校、専門学校、大学へ行って自分で仕事をつくれる大人とかになってほしいわけで、そのために小中でどういう学び方をしていくのか、それが学校ならばどういうふうな形でいくのか、外と連携してどうするのかという視点を必ず持つ必要があるのではないかと思っている。

事務局 十日町市の学校教育のめあてがふるさと十日町市を愛し、自立して社会で生きる子どもの育成である。つまり社会というものを見据えた中での教育というのを一番大事と考えているが、その部分が小中学校の義務教育の中でどこまで社会とつながっていくかという部分について非常に大事だと思っている。キャリア教育というような形で高等学校、そして中学校にいろんな実業団の方々から関わっていただくような授業や体験、そういったものも実施している。またアントレプレナーシップ教育ということも、いわゆる創業、起業家精神を育んでいこうというようなこと、これは県全体で取り組んでいこうというような流れになってきている。

ただ、高校のことは我々のところで何かを訴えることはできないが、高等学校教育とのつながりは我々の中学校の教育でも大事なことだと思っている。

(3) その他

① 次回会議の開催日について

次回の学校視察の予定について説明

② その他

なし

(4) 閉 会